

## 夏秋トマト長期穫り栽培に適した誘引及び遮光方法

農業研究センター 高原農業研究所  
担当者：井上宏美

### 研究のねらい

近年、台風等の自然災害回避を目的として耐候性ハウスの導入が進んでおり、このハウスを利用して高原地域では主に夏秋トマトが栽培されている。耐候性ハウスでは、施設利用率を上げるために、従来の雨よけハウスよりも栽培期間を延長した長期穫り栽培が行われており、栽培期間の長期化と夏期の高温の影響から、草勢維持が困難で収量制限要因となっている。

このため、夏秋トマト長期穫り栽培に適した誘引方法、遮光方法を確立する。

### 研究の成果

- 1 一般的に行われているつる下ろし誘引において、誘引線の高さを慣行の畦面上150cmから30cm程度上げて180cmとすることで、草勢の低下につながる誘引回数が減少し、増収効果が得られた。
- 2 この場合に用いる苗は、慣行の育苗日数60日程度の苗よりも、夏季高温時の草勢確保の点で育苗日数40日程度の若苗が適している。
- 3 誘引回数は、栽培期間を通じて2回減少し、10a当たり約15時間の短縮が可能である。
- 4 誘引補助器具を利用すると、踏み台などを使用することなく、通常の立ち姿勢のままでも比較的容易につる下ろし作業ができる。
- 5 夏期の高温対策としては、遮光率60%の資材を用い、日中5時間程度の遮光が適当である。その際遮光資材は黒寒冷紗より白冷紗を用いた方がよい。

### 普及上の留意点

- 1 遮光開始時期は梅雨明け後、日中のハウス内気温が30℃を超えるようになった頃を目安とし、曇雨天時には行わない。
- 2 若苗の定植については、肥効調節型肥料を用いた基肥一括施用時の試験結果であり、活着後は草勢が付きやすいので、灌水は萎れない程度まで控える。
- 3 本試験で用いた白冷紗は、白色不織布(幅18mm)とネット(幅12mm)を交互に配置した資材である。

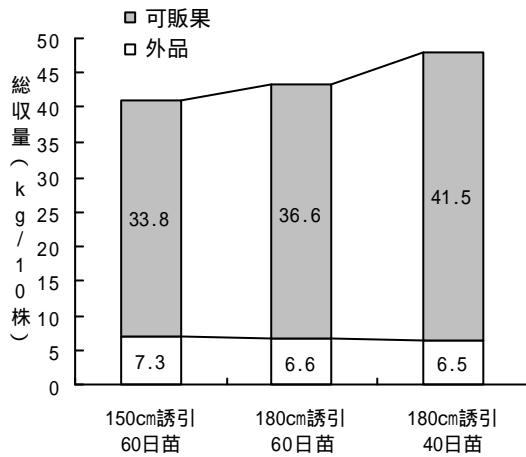


図1 誘引の高さと育苗日数の違いによる収量の違い (平成13年)

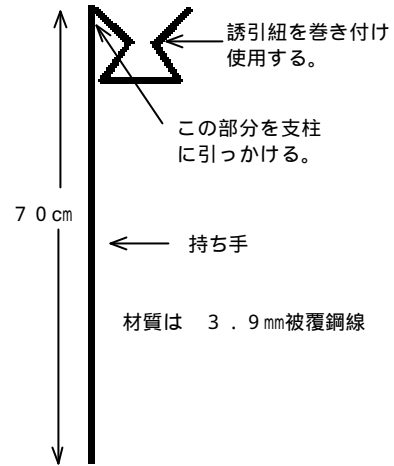


図2 誘引補助器具の構造

表1 誘引回数及び誘引時間 (一畦70株あたり)

誘引の高さ	誘引回数	誘引間隔	誘引所要時間 (1回)	誘引所要時間 (期間計)
150cm	7回	15.5日	23分	161分
180cm	5回	21.3日	26分	130分

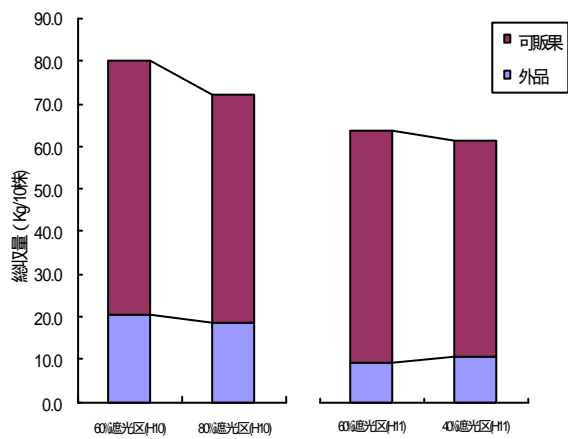


図2 遮光率の違いによる収量の違い

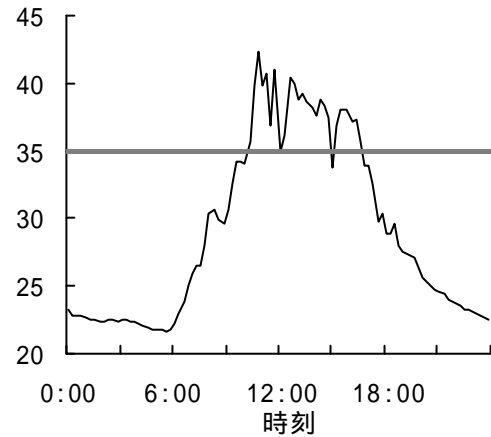


図3 夏季晴天時の施設内気温 (無遮光時) (平成10年8月2日)

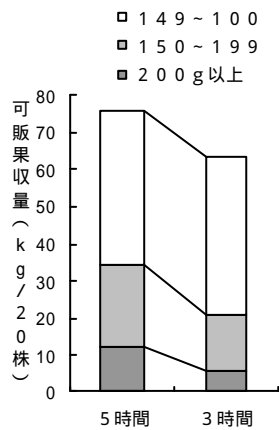


図4 遮光時間による可販果内訳 (平成12年)

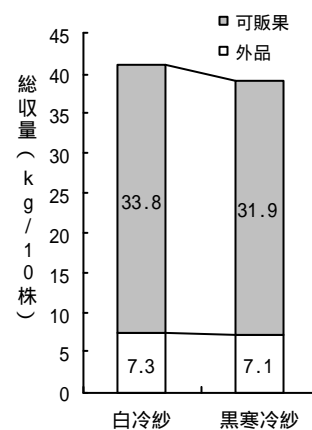


図5 遮光資材による収量の違い (平成13年)